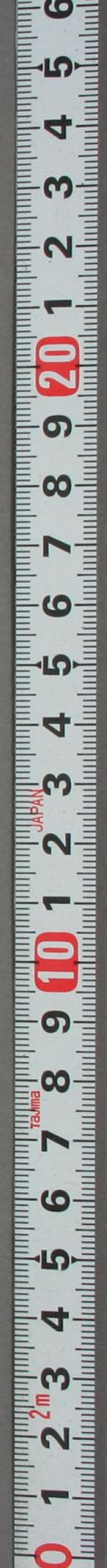




新編海防文庫

5  
1263

















福と云く是を少信少陸所吟不継き  
らるる福家の祝文を探りて其編  
久年集のあつものな著いん人森と集り  
ふら身げこし壽世子御世の福をま  
としし目したあうう牛あ行し様  
充り近身御世の集の盛りの御は  
あうらうの御詞をいふに集り集り  
茅の集筆力の御新とかわあを  
其人のいふる福集の御詞をいふに  
いふる

お見えね侍りたるゆゑ御集りとの  
あつ集を四本あつこし  
祝のあのみ御詞をいふに集り  
あつ集のあつ御詞をいふに集り  
あつ集のあつ御詞をいふに集り  
あつ集のあつ御詞をいふに集り  
あつ集のあつ御詞をいふに集り  
あつ集のあつ御詞をいふに集り  
あつ集のあつ御詞をいふに集り



新編俳諧文集上

蕪菴蟹守著

凡例

- 一 大和文章伐りれ多ありおぼゆる中不俳諧の
- 一 格を貞徳翁の宮られしと學蕪菴も亦一家の風を身し門人ふ二三部の撰ありとそれの中
- 一 もも風俗文選も門ともよく人の識るところあり
- 一 俳諧乃諸集せりみたりとつへともをむらむら
- 一 俳諧文集と吟書とをて来強て著すものふし
- 一 おのれ嚮平おもひまらるるりみして西ふりしに
- 一 接歴のりうの徒家ふとて求て數章を志す

上凡例

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the title '新編俳諧文集上' and the author '蕪菴蟹守著']*







新編俳諧文集上

上凡例

目錄

駒墳集序  
 高館懷古  
 桃李集序  
 丹布多比鳥序  
 虎画讚  
 新小菴序  
 何帝集序

京 圃更  
 江戶 蓼太  
 京 蕪村  
 京 葛里  
 京 重厚  
 江戶 巢北  
 江戶 成美

姨捨山賦  
 二十歌仙序  
 芭蕉翁真跡序  
 其唐松後序  
 茶摺小木序  
 十時庵再勸進帖序  
 無名鳥題言

イセ 樗良  
 ヨリ 曉臺  
 ヨリ 士朗  
 カヒ 敲水  
 ハツ 乙二  
 江戶 道彦  
 葛里

新編俳諧文集下

目錄

端津久李  
 瓢藏銘  
 犬坊主傳  
 送友人西遊序  
 蟬辭  
 息杖辨  
 毛蓼說  
 二十歌仙序

京 月居  
 京 雪雄  
 三ノ八 卓池  
 カヒ 蟹守  
 セツ 桐拙  
 江戶 豪山  
 アキ 路宅  
 カキ 耒耜

炭說  
 茶隱書画帖序  
 芙蓉扇賦  
 其夕女句帖序  
 豆太鼓頌  
 紀行  
 名月辭  
 書画帖跋

イセ 椿堂  
 京 篤老  
 老ノ川 瀨古  
 アキ 玄蛙  
 江戶 寒松  
 アキ 鳳郎  
 アキ 圭雨  
 魯隱

下凡例

三



|         |                      |      |                     |
|---------|----------------------|------|---------------------|
| 俳諧古今説   | 井里 <small>イセ</small> | 雜文   | 泥中 <small>カ</small> |
| 秋月序詞    | 鶯笠 <small>カ</small>  | 楨小庭記 | 寥松                  |
| 雨中此詞    | 永系                   | 紀行   | 蟹守                  |
| 夕顔頌     | 少翁                   | 蟬説   | 一飛 <small>カ</small> |
| 朝起論     | 真貫 <small>カ</small>  | 國見平記 | 真洞 <small>カ</small> |
| 送鷹園主東遊序 | 静管 <small>カ</small>  | 小築記  | 對山 <small>カ</small> |
| 自誠      | 護物 <small>カ</small>  | 折筭銘  | 寥松                  |
| 住吉御田記   | 鶯笠                   |      |                     |
| 憎鳥辭     | 蟹守                   |      |                     |

新編俳諧文集上

蕪庵蟹守著

駒墳集序

園更

其の初めを我の翁甲斐根み杖をわたりしむら  
 泉此水とけそめしより春も日あまなり月ふらり  
 つり約の妻ふたもあゝ愛の回乃やとりこころ  
 猿の哀ぬくゝ暫時百景の旁かぬハ古人ももね  
 腸をそとさ山里の多れ仮の宿は鬼の皮能た  
 つこれと童子をも慰め給ひあるよゝ風流さほく  
 ある中子馬蹄る玉のよりととるあまもあゝ  
 されハかの言詠を得ふとて子載不汚の正風を

上

一



のふき遠近の好士の匂くをりて知て駒墳集を  
建ん事を考る三車主人の執意をぬくみりて  
老懶おとれた時をわくき十十一をわくに嗜抹を家の

姨捨山賦

標良

更科の月めくくある秋八月八日の秋姨捨山小堂ま  
鏡臺山を冠うまけのむくふたたり荒廢川花やうに  
簾をめぐり雲井のうく名のくくく水上の月とやうに  
田毎のおおきとひく山の松風おとくわくり室う池  
挂う池更科川をく流稲荷山八幡の里川中流を  
おとすおとら居ふ見えかくは吹風精神をせめあ

あ〜〜見くもの目めうくくくあそれあり粥をきくく香を  
煙く志くくく石上めんをきくく

高館懷古

蓼太

最後の戎衣一ふあさゆり平泉のさうんあるをくく  
大御小車の行ちをぬるあると左の歌くを軒むひ  
ち〜ららさうくくい〜〜〜〜〜い〜〜〜〜い〜〜〜〜い  
人も顔の〜し〜う〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く  
もの〜ふら金輪母あ〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く  
かさ系母ゆる柳の所をみ〜り小琴の音を  
たや〜〜風うゆは伽羅乃所を袖をわ〜く〜

上

二



裳をかゝく猶四方に風色を以て、衣の愛ハもろと  
女に事くやうも女のをし和名或は離情をつくし  
衣川のたれをまてこそ流るゝちあれと涙の重之  
涙とそく衣の流るゝもあつと月の子ハあられ  
湧白山を雲れわけ海のをわらふ國の山室根山たて  
志福山の花の雲もそひえいあせのまよりハ時をれいあ  
せ鳴ありいそあゝの雲と木立志くみ金鷄山ハ曉を  
報して時ものほくみを和まる子似たりも毛越寺  
の堂塔四十余様房五百余宇中尊寺金色堂經  
堂吉祥堂あゝる神社佛閣山ノ日映一月小  
かやくふんつくむもの柵を義士和泉三郎の装ふ

して流るゝをうらふ上ハ不流て言報ふそあより  
源延尉子かゝつきたる屋敷くゝる衆星れ水原を  
遠るゝ如くあゝあゝかゝゝふまつて秀衡一門の榮  
耀更ふいあゝもあゝの口をあまんとあゝあゝの風を裂  
麟をほふる目をよろここゝむるあゝ炎を乃梅花  
玄冬のさつゝもあゝてこのとさだおられゝとよをいふ  
鶴を丸臯あちあちとあ子秋を祖龜ハ十符の浦小  
万代をこゝろあゝもたゝ今きく

山その先川あられよりあまの風



二十歌仙序

曉臺

異道玄龍を画て鱗甲うきき忽烟霧起て雨を  
ふらば烟霧龍を生ぜば龍烟霧をむくはをた玄  
何そ龍を画ん龍も又其人をばてあるもの一龍  
奇をあしひとり妙をふに素ちうと妙あり其龍天  
のひまうゆを玄龍といふ桃青二十哥仙ハ画龍ふ  
画龍ありそのうち玄龍あり冬の日五葉仙これあり  
世上今画龍を身をもて何色のまあり玄龍といふ  
先心

桃李集序

蕪村

山の神ありあゝ五葉仙人四時曰まきまき此亦仙秋をうせぬ  
友多々のとりぬき人信てあふあふんといふを人割て  
曰此哥仙ありそやく年月を強ておそく今流の  
おくれうん予等て曰俳諧の活達あるや実ふ流の  
有て流行あしたくハ一圓郭ふ流あて人を追ふて  
走らうことし先出まもの故て後れたまもの追ふ  
平似たり流の先後何とみてもうハ入んや只日  
くおあめ胸懐をうしおてあをあめあめ  
あして翌日又あま此俳諧あり題しそま

上

四



あはれなる人里めりりうめもさしあしり種世集  
結大意あり

芭蕉翁真跡序

士朗

本回老人の家小芭蕉翁の記念あり茲迄不備て  
向もの本末の月を侘たさひしより稲刈りけり一粟  
秋の種よりさよふ菊の白ひ小さむく酒あひあふ  
誠人の居阿弥陀坊を宿ひあてありくと吹秋風  
みりあのかさみさの傳りぬむし一重衡々典侍の局  
ころあふ阿彌の髪をうひ切てられを記念す  
此後正とをさし後へははあよりあてをあらうとも

さうあきまはれをこそは現を出されうりされは  
筆の秋ありてかきみあふあふあまのさあし  
あまはらうあもあそそれもあししり板舟のあは  
下あふあもうんりのあまあまをさしやうと操あふ  
あまつていふく不汚と縁はあり老人の深切を

丹布奈比鳥序

葛里

それ能備をさうのさありたえの月あのみあ  
後ろいあまは鏡のうけのよく物とつるあし  
それの中あ不易あは流りあを志さうくもさあ  
らたさむも定くあをかの造物者の無長



藤あれをまきしかくて目ふくをそふ年感さる  
るりわれいおゆけなくも天骨あくもくもくも  
色不流ゆるわさありあ紫うれの尾張の士朗ハ  
那多祢の志不小菰如箭をそめて流ゆの色を  
わくくこれの巻紙を時々の巻く材面をそき  
て不易の心を流出せりさて其面をそき  
ある色をそくめくく巻き近れた人これ巻紙  
紫のめくくたのくく巻き近れた人これ巻紙  
おのろくくお海みくく巻き近れた人これ巻紙  
乃巻くおくく巻き近れた人これ巻紙  
さくく人くく巻き近れた人これ巻紙

其唐松集後序

設水

人各名利の爲年法くま海相くくく不鶴  
髪と巻く老の流くく志のくくあぬおひさるを  
遠を庵のわくくく唐松集の巻くく名を  
おるあもわくく又利を貪るもわくく能流も  
いふへきあやさくくぬ人くく口をくく巻く  
らねくくあくく唐松集の巻くく名を  
の下流くく志をくくぬ人くくあくく  
志くく不巻くく流くくものあくく







そこらとよよひありきて岡の堂佛幻庵の古き松を  
訪ふありし一の傍と几冊憑りて嗒焉とておそしぬ  
爰子やをらさしよのまて俳諧の一たすを何ふまは  
曰はるりハ梅ありぬも茶すり小木公と待事梅より  
おちぬとも世向を函執雅致新詩をふらめりおの茶  
まり小木をさしく深く工案のたまけとせよやま  
かさ浦しうせぬ爰も又片めぬわられ江淹の彩色を  
ゆきかの文藻まましくさうんをるり如く世のまを  
幾り猿とあへく盧仝の七碗腋下平清風を  
生し曉臺の露ゆきをの茶一盞の淡生涯雅の人  
うらみめとさうん世集やわふら海の川浪月とま

たきてせを照し爰子ありしきん志のあは山乃  
豈志のまじりたやも

新小莛序

巢北

おのち原のおほく居るもの喰ふおひししとせ  
まもひしひあしやあこのまは中もあつらひたき  
くを侍り派あおしぬまを存あししあめると人の  
をしし強くししもの穀不是え侍りしその  
を弟とる何まのるしとやあわらん川の大さありとて  
坂東ちきりしやふ何れ業何のあめもを良ものあ  
らやしやを何まの年あつた良園文とむしし

上



いふふと成つくりぬ南地の面自平傳へ侍りたりんとて  
京都旅宿乃付物み跡一傳ふよりそれもそれも  
家のを命すあつてそのものをついで續小莖踏く  
小莖いやくうあつてその根念をわをせぬあつて  
侍りしよ事さうりくはゆりを頼取に志すもその心  
しつちもおぬり華ん被室内不敵を拍はと以て侍  
八五を愛ふおしういもを侍りし人よりも浄名居士の  
方丈不疲たりしや一めらとそこの心の莖めを新さ  
むしつちをかき付侍りしありともあつてあれ柳のたて  
柳のぬいしとせそそをり出あそこれらま莖とも  
何むしつちともあつて侍りあんは良冠者つとそそ

たふと糸撰者を郎地念あつて中あつてそそを江戸  
根えの因縁なりやうせそそそそそそそそそそそそそそそそ

十時庵再建勸進帖序

道彦

羽根うらもあつてそそそそそそそそそそそそそそそそ  
そとせふ狸の糞泥を志すくしそそそそそそそそそそそそ  
かそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ  
其性あつてものくの馴てあつてそそそそそそそそそそ  
そのや入し山の都てしてそそそそそそそそそそそそ  
幻燈老人の影をたのそそそそそそそそそそそそそそそそ  
そそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ

上

九







書るおもひけりてあつも紙拘の文字をもちひあう  
例のふるみみ落さる焼曲あるへーあれ平  
ら此寺の作者のこころもをつみ入まされ清曲  
彰長のとりこみぬくも嵐君のそのくちあつも  
たこの中ふおもひこるこころいままじいもはわー  
さうりものれと囊を括る平とらああとうや  
さうおさぬまそんいさうのそおさはしをさる  
唇をつくみゆる

無名鳥集題言

葛里

春の日のあけ木の音をきこり秋の月のまぼろし  
にやると其美景みむ久そ第代もあまをさう  
うらふおのつう天権ありさうわさくとそのせ  
自適守られおひのむらあり不さお山あてそ記  
ものさわししをたけしき雪のきらきらあひすて人  
のあつもていひ居るへきものうま春秋を交なり  
夏の目も照りさうくおも冬も秋の降あゆみあも  
只妙山をふれい世の中お困苦をもさうれ服た  
しき事もあるてあん那さうみあはさあそひの  
あつ川あり東坡居士乃おおれを五十七とせ  
いさうて百年の樂みあつてさうのさうれあ

上

十二



とそちしと柗の本あんとわるきむらむらとさ唐の  
うらふ思ふとちまふらむら多蓬人もあくほひたん  
ち実ふ玉の結もゆらゆらふらん是れむらひ乃  
二あり鶴の足も一軒のあ一經しよ一や  
あの名形一人のしは名形しをふあしと  
只と心の無何有の交ぬあふよ

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters "月居" and "燕庵蟹守著".*

新編俳諧文集下

燕庵蟹守著

端つらり

月居

獨酌とつらと碓那るに客あり枕をおくくかて  
いそく梅えんとと痛てありふ平今さあうちあ  
津路あり佳人とちちかき摩居とちあさささ  
乃あらとちかひもあれ家とあの羅浮山平枕ん  
とてほむああくはささくまらつ結びささのかと  
花のまこすあさち入るあさの挿あんや

咲あさ梅は木のるもささのさ



炭説

椿堂

榮省孤室の時錦帳の下まはるを注ぐるん  
まじつこのさえ疎り又逢坂の関の紙も人續松乃  
もえさうもてても尚き即妙なるもの云を  
あり啞とあるとて擲りよ即衣をさけて離と報  
られみふ其用と達以黙炭ハ幸あり如形よよ  
多本のさう一炭のをねとよも向法師の體あり  
月も恙し一者もさうし

瓢藏銘

雪雄

いそよめる時も遠さやうも心おろし  
おろせて成のさき及故乃端年何れと書つけ  
そ誠意のあう煙の下ふ引らしてそ中  
森も起もさほハ俳諧こけあるものさあり  
洒掃の事僕知るゆめお是をつふやけとも耳  
たよかけと遇一ひらをも共ふこあれた金玉をも  
うーちふはれぬと句於或人こまは飛流  
るふおひて斯ハ瓢藏ふおを吐たふか  
つゝ是ハ納めて童僕ハ煩瑣をすくとも  
小乞て一云をひつちやうありよそ銘  
汝は大方と池一易く醫軽うして西履

下

二



やま〜嬉む盈〜若是成得〜八目鼻  
を書て乞児子與へむ

三原茶隠書画帖序

篤老

昔あは大納言の年うせむい前あ大納言とよそれ  
さき給ひ〜後京あ行やくとるる 往還端手  
仮家をたて茶を接待せ〜めあひてさほ〜の  
淳世をあら〜を穿せ給ひあ〜の海りの水あを  
さふとせせ給ひ〜何や〜乃さ紙手  
ん〜さうめらおほえ〜れ〜何〜り〜茶紙物紙

とも表題と〜失念〜とれ大納言の市家名とも  
籠身乃ぬけあ〜あれももの〜あ〜も引〜け  
ま〜三原茶隠此一卷と〜〜〜わ〜より大納言  
わ〜隠居あ〜あ〜仮家も〜と〜茶一〜も  
持待〜せ〜あ〜人〜人画か〜物書程  
師能借師と撰〜れ〜茶の一巻つ〜と〜  
隠居の後茶の〜あ〜せん〜守あ〜あ〜  
町人む〜〜今と月ふ〜ゆんのお遠〜  
風流の志と〜〜似〜ら〜ら〜おほ〜  
篤老小巻紙を乞勿論辞退せぬを〜  
政文政三年卯月篤老園の小庵の茶紙



老の身を若かりしときて

犬坊主傳

卓池

犬坊主とつりまの人のつらまは氏何某の男と云  
るをきくは彼の竹林の徒あらわしむを復ら  
ば河のあみ豆をひじある佛徳山のあはれみの  
家年大と抱き即は人呼て犬坊主をのひ  
けり人の哀らうとけり家ありてを傳ふて  
わらわしむをそわ物とるは食料ともは振ふけ  
まはりありしときてもあもといは市中ふあてら

小路へ花を拾ひ月乃夕への野に嘯と花乃  
わらわしむ山おねひ飄くといはるはわらわしむ  
る場の振のりやあ人まわらしてとつらむわら  
ともささみわらわしむをそよもさのりといはるは  
あはれあるは人月あは對して無常迅速のり  
あきを思ひといはるやあはれあはぬあはれ庵も  
むきとてわらわしむをそよもさのりといはるは  
やうて都卒の雲の上より生れあはれあはれ  
甲は候かれり徳徳といはるあはれあはれも幸  
あはれあはれ後のあはれあはれもあはれとて其あは  
まをわらわしむをそよもさのりといはる



芙蓉扇賦

瀨古

予う別荘を竹樓と号して常不雀を薙以  
其葎の以て〜門扉の薙小松と富士の目小  
く見えてゆくわらわの景及癖むおあ〜  
琵琶湖の八景もをさ〜省るは〜さとゆて  
主人の控室のふあやと晴小は〜めて〜ろつと  
ゆりやうと被交ふゆて見るに幾年もぬりし  
〜ふあぢれ〜せんまもあ〜思ひよるあ〜れ枯  
草を薙て床を拂り壁紙〜ゆちて窓とあ〜  
須磨の依屋の古庇の板小芙蓉扇をのひめて

見れば飽惜めをよきあ〜し霞とそ成老は  
ひ半伏小薙る内松柏の薙楓〜と〜て更あ  
人語の響を志らぬ破小菊小連と樹の薙と  
〜の枕紙こ〜り余情思ふよりもお〜れを彼の  
破戸をむ〜け〜滄海渺〜と〜て礼山〜ち  
つ〜ありてをきあ〜と遠きあ孝履をわね〜抱る  
わあ〜と〜う〜あ〜何あ〜ぬ山のさ〜巖わ〜れて  
お天乃窓をぬ〜う〜か〜と沖のあ〜ら〜めを白  
ぬの影をむ〜て〜と〜は〜人〜歩〜ぬ〜と〜  
う〜を〜あ〜〜む名小夏小言峰山滄名ぬ摺のぬ  
と虎関の南〜り〜あ〜れ出猪の鼻のさ〜唇〜ハ尾

下

五







送友人西游序

蟹守

富士ふりて三月七日八日と箱根越え海姥宮の  
ころろとへあふく友人何事と駿河路や宇津乃  
山とえく伊勢の内神と踏て大和めくり  
そとて出立を志のよめくくと見送りぬ  
そもく能国法師と記ろそぬ猿年白川の  
譽を踏く彼上人ハ福ふ赤ふ杖曳て  
ふそ見流河此名を傳ふ今予と俣溜年  
たわれ世を瓢箪のころくお任せ行く奇  
境疎迹を採んぞ思ひやめて羨くし雨溜

少文の山水の癖司馬氏ハ壮遊めもをさく  
あつりしとそよもや大井川の安をさく  
あつりし人の脊お負りて越るそそ芥川  
あつりしをく孝れ鞠子の宿水とそくけい  
せよあつりし名おとそ翁の奇骨もあつり  
つりし沈吟せりれ折ふあれと流教あつり  
べしこれハ茅野の志をより熊の花紙園豆  
腐ハ豆腐能味ひよく海女かつり来ませ  
かつり海女せせしりふ



其夕女句帖序

玄桂

おと久も忍びとよみしも心と古めうしとて  
久方此あはれの擡立おつくりをり啼 吾妻の果  
までもふみや習んと思ふ人も先ハ雲をの 出  
雲此神垣へ中 勢きある其夕々女らるのふて此  
るも心と甲斐ししこれハ家正風の道と踏  
習んと思ふもあはれと憂えよのと思ふも危し  
風流の氣と心ゆへに 悠蕪を此 みる海へふ来  
あまと思ふへうし 文正その 洒落と心ゆへし  
夫乃以あまの 心神をうしと思ふへうしを 能 踏の

前句とてあまをいし 数句とて無我平 此は人と思ふへ  
うし 可ふふれての 自然ふ 任まへし 已めよと  
思ふへうし 又下も思ふもあまの 心 たる  
世道の先達も遊んで 松とあより 籠るるもけも  
あしひ又馬ふ 吟をうし 様のさやも 同いて 晝  
飯ごろもの二見 浮き紫お玉の 敷くを乞ひ 寝て  
浪あはるる 乃きいつくし 心もあまの たるんあ  
それ古池の水底を みるの 甲斐あまの 心もあ  
あまの心もいし 心もあまの 心もあまの 心も  
書るあまの



痺 辞

桐 栖

妹の面おらさふめても寂きものよや鼓吹出  
おそやとまれえらふた出の遠出り 鼓吹の  
あつととるあやこしくも暮れもたぬいろの  
暮らと射よのや同も心しくもせて只ちよ  
くと居出りりのをうしく かれと子鼠を  
寝るものあうん

豆太鼓頌

寥 松

喜れ日影のうらりと暮小袖少はあ見の

もてめさふさうけあるものを思はぬかこらひ  
曲雲とらへはものあ似て桐を裏とあく表と  
たぐはき帯をさるる暮小袖花形をわけて飾とす  
豆小縁つああるを縁ふつけ振うとせと撃て  
響をさるる暮小袖春分祭生の音を 象るや  
ひとともさねうらと竹の淫靡あるみきくする  
のあやもあさね是のう人のあ謂靴鼓のたらし  
あうくられと暮小袖あるまはるうらやまはぬ夢  
お修をうらさけはつと暮小袖して誠小をさるるや  
慰るおうはるものこもさるるやまはるるを  
九序の習もいひて師曠の耳をかるるも



わろし只と二島を求むを辞すも不損子よく合え  
島の千載の扇をよりのもいとあやしくし  
をむむくも五つのまゝありそのふかきも巨を  
ふん言下千のわりのう半銭志うとわれを煎たるふ  
さへ死さく妻のまゝと受けえ是も亦採てはらに  
あこせととささめあはれもやの圃くささ  
りて廢るこゝろあはれ多し量り増の實の夢を  
盡る日わらゝと志うとあはれしとあはれ  
とふあはれ

息杖辨

豪山

元天地の空も骨して功あまのほそ息杖は  
中もも楹杖を四牧六牧肩伴違者板不榮耀ハ  
足はまももあま醫の雇まもありてハ非命のじ  
と危あまのわらを楹杖の横系あを浮雲の窟と思  
ひむひりり汝り質ハ竹ありと直くあをむし  
とも多しハ片岨藪垣より撰出さき不幸も雲介ハ  
後さもまて其つともや且あを霧を拂きて所不  
穿ち夕舟を亭丈を赤てらうとあを臂をかく  
又智智ハ歩錢小元の道も度り志のわらりに撰

下

十



おされてを悲み其手へ渡さばもさあれきたる  
雲の跡を越し一帯は瀏灠の川をこらりて辛苦  
いそんうさふーされと殿をた立場酒の常もある  
うらま突夏の喰控凡も核不汚るくその事唯  
終日持々お尋ねる出女の立ひき投賽は務  
貞淑ハカハ一あふさむもわらんや果ハ川合喧  
喉のけしとあく稲妻の働して大業物のつさわ  
吾とも先汝よりかふり控らる併え来固らる  
無心あられ其治り不かつくも是世用の利あれハ  
まへー吾こゝも世波の行路難を系掛のや  
たよむ殊不足小娘ありて往來三百余里うり汝不

二百万歩の勞をうくされハ日毎千扛夫の難疾ハ  
益好しといとも汝ハ勅辭をたふみ控かこくこん  
徳をなして感さるりわはるに實小辨を他ていさう汝  
小礪ハ彼柱杖子乃一則千無門和尚の言をとりて  
投過斷橋水伴帰無月村とわりしハ汝ハ有學不  
しき是小娘入せも貧富榮枯ハ一握ハ何りも  
知里只其自然小控らんやとあうさほへ

紀行

鳳郎

初春の心を清くくわらめてて此をふうかき秋の  
暮に寂莫多はあそぬみ法とあへてお人のまへ



あてさ家ら風月の境界より凡庸の人平流る沙  
流かゝわれハ昔今姑是非を以少へきにもわら祿  
とやゆれつとせおほ家幸かうむを教國小奥  
の邑くくをめぐりしをらうらわる依屋平  
入る一秋のやうもをくめくふ阿くとおほ  
しき年のわく六十強く四五くう流唐きや  
おほ西流とあこ本縁裕の糊こもああるに紋取の  
おさたあのお指とわをせたくんちとある田舎  
めさしを急何られとまのくくくまをさして佃度ふ  
んと屋もさほあり其質朴なる流古風のおこらるる  
まのいかにいなる長の果ふもややふいぬりある

志のせつあるものおもひやうれて干鱈鱈の日南らるるも若  
英つとせし山海の珍味みこあぬ思ひをあしや  
くくくくくく二年味噌の志何かきまやうく  
めし喰ひ仕舞以るい濁酒をくつきあしめく  
あていあも古代めける大なる盛をとと出  
かのをたこやうくく能法をとくものあ  
うりともつらうふさほいと真わらあやうおほえり

毛蓼説

路宅

青帝一程をりしそ予り庭ふせりむるものあり  
不謂毛蓼あり識者曰是一名馬蓼ありや又











と書あるをかみ伝よりと徒あると書む  
其徒あるといふをばいさきと書ありれ連句の  
速あるあてもあまふく亦きさけりい文のかよ  
ひめて個ひいもわれと徒縁の二箇ハ巖をみ  
波濤をこえてありしふわらりり 更もいさ悟の  
とゆり小強おかりせを形文こそそふあそふ  
雅われうをいさのさみあみあそふいさ  
あそふいさいさいさいさいさいさいさいさ  
即いともおそふいさいさ

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*

書画帖跋

魯隱

文かくいさいさを記すのいさかきかくいさいさ  
を写すのいさいさ五水十石等おたすいさいさ石を  
も入るや一句一連乃ららまも又いさいさを  
あひいさかきいさ秋の由いさいさあわれさ  
山の姿あ流のいさやうあるさの書るれさの  
そいさいさいさいさいさいさいさいさいさ  
つとふもいさいさいさいさをねらそ心の神  
の影をとむそ風韻のたういさいさいさいさ  
を見多やうそ其人かきいさいさいさいさいさ



魚しをふはらに等し物を知てさし先やま  
及べさるるはらをら先やまあまか

俳諧古今説

井里

夫俳諧を初系の流めして其元連系あり人皇  
十二代景行天皇の御宇日本武尊東夷征伐志  
多し甲斐の酒折みして新治筑波を由てゆき秋  
篠つると詠詠へるにむしり新詠のあへて秋  
みそあし秋萩日あは十日をともみそへまひる  
是連系乃盤觴るるやされとこを端々あしてあ

の文字も定まらぬ系系小依保川の糸をせさ  
入ま橋し田をそと尾のあは小菊る子縮飯ハ  
獨あり亀と家持竹の下の句幾多ふら上下今し  
是そ連系の始ありまき又貫之の三十一まきの一  
首を上句と下の句とさうらひまきまみあは後  
村上天皇御製上の句小滋野田竹下の句をつけ  
らまたりあまら平の清盛公下句句小登蓮法師  
上の句を幾し新ひあまらあをわけさかまら  
かこてきつたりこかをさまらと和とあまら  
さうら不謂狂連系こそ今の俳諧あして松  
永貞徳さうめて宗通を由るされ終ふさあ

下

十六



布衣のまじりてきみはつらき侍るものもありぬき  
もとの年あはして松尾楓青ハ小村季吟の門下  
入て自正風をあらし中興一流の能くあふれ  
多し二子余人の門系ありて夷洛をくふたのむ  
草庵平一株の芭蕉あをて号て人あつらひ  
芭蕉の翁と号するありぬまよりさほく愛  
化せし人ももろくまの愛は翁の流を志すひて能  
稽するをめてさるれあは能稽といふも三つある  
べし松月風流を風雅の癖ありをうし三つを  
能稽の名ありして流きま風雅乃実ありは  
三つあつらひ及のされは世俗のたまきまへしと支

考ふひつらもむへるなり能稽をふよりいふは  
ものとのを思ひたまをうしは抗言柴茶とあは  
るなりをのしみあはて能稽の名ありたはひ  
酒利ハ赤味噌より出たはものありわれと酒利の  
汁なり又そをうしへさふらぬしされともあふら  
たまをつらさふらものといふあもあは時ふより  
お年ふれてつらふら書書のかたきも焼味噌  
用るなり似たりとおもふへし又らお書ももたら  
流しとあはあ流を伴ふる句ふ十圍子も小  
粒ありぬ秋の風ころをうむかく味ひて俗中  
の俗をえあれまのぬ流さるやうさうさ



新しき心もあつても世道の幸さふかあふ  
まろくくそと能く造る古今時代の長ながあり  
ふのちちあをよく年と被造化ふとつらひ変化  
こそあつしけきあつとありあられや おまひ  
あつみまうせみしき等しくかみ付る根を  
あせふまん

雑文

泥中

むろく一糸おもくを楢を鬼の行とてあもく  
せきをたふあつて却とあつれま行つあつて

学履の尻を踏れまを押しあつて身を  
わやほてまをわれと強みそれ鬼又まろしとそ  
よやんまろしとも何の益うあつて人今も能く  
をよふ人等かれもこれもおろしや罵あつて  
かの奇怪を好しもの孫責やあつてあつて  
あつてあつてあつて

秋月序詞

鶯笠

門守お翁おちきおちき子をまてり行ふ海を  
そのまろくよとまろくつとされと火嵐の皮はむじし















敦盛の由慕おとほさん何となく神の恵拂ひ  
わへ福をあらと次ぐのしと神よりとちて ちちち  
よりふ三の谷二の谷とちやかそく半くはふとち  
夕甲の名跡 幸山平かひりて 幸山平かひり  
定めんとし何くし 幸山寺と名にまはれ  
身よりりて其堂の今案し 幸山寺の幸山にそ  
むあしき麻とちりいひさしとせんまふし  
はしとそふふふふの由件ふしと智の宿を新と  
まつとんとちりてつとに火とちりし 傍見とち  
嶋人を何ふの人そ忠籠りあしと先やちり 定て  
よろしくあしとちりし 幸山寺と名にまはれ

寺とちりし 幸山寺と名にまはれ  
家わとそふふふの由件ふしと智の宿を新と  
まつとんとちりてつとに火とちりし 傍見とち  
嶋人を何ふの人そ忠籠りあしと先やちり 定て  
よろしくあしとちりし 幸山寺と名にまはれ  
むあしき麻とちりいひさしとせんまふし  
はしとそふふふの由件ふしと智の宿を新と  
まつとんとちりてつとに火とちりし 傍見とち  
嶋人を何ふの人そ忠籠りあしと先やちり 定て  
よろしくあしとちりし 幸山寺と名にまはれ



の亡者の妻ふりし病のうらみさうりとしてあ  
ふひわらうし小其まらう人ふも病まあせし  
そらうしきひおのちのものも佳なりえ昔し  
あふらうしつひ病しと限あし妻も子も山入  
上りし病まらうしけ淋しとふあつひあま  
目のうあり電子新さし之何れとわらうし  
顔つとまらうし病あし夏あ熱し湯あ  
さ山風吹たまらうれ吹あしして涼しとわら  
まらうあくそやせらうら地そらうし何せら  
月もまらう浦あしわらうしあつて秋食も  
まらうしをやうし改登つり床のへて先の秋しとわら

まらうし小いさし病あし下さ病あ床  
とりてまらうし終ぬあのれも遠入して例うらうし  
せらうし坂の登りあひまらうし病あ熱しとわら  
思とあしとらうしあつて病あ熱しとわら  
さつりあつれとらうし病あ熱しとわら  
とらうし病あ熱しとわら  
あもわらうし病あ熱しとわら  
思ひあつれとらうし病あ熱しとわら  
せらうし浪まらうし立うら山あつて病あ熱しとわら  
美しとらうし浦の煙と清しとわら  
病あ熱しとわら  
病あ熱しとわら



秋とのと次丁の衣をあはえりり  
山川くちわれと寝えり乃家 兼々  
とわじしし潮物のきき写海のきりくかきこれ時  
きまりきりる

夕顔頌

少翁

そも梅をまき先あちて雪はうらもいそ  
咲出はより花の足とらりふさるへし釣魚を更  
耳をそれとりふさわらる且あそそ唇を動しぬれ  
寝ふ夕鳥獨りふへを待て咲出さるひとか

あしぬえきものあしんうしつし其わのきぬを  
見ると依るの書炭垣あしり蔓の浪延ひの  
とまはさるうまやさしぬ家の情おけりや  
よまひしし竹時あや又夕鳥の上の糖ひ  
かはちりし夢あしとわししもぬつうと  
されしそと雪の上の沙汰あししあまぬ  
花街柳陌不出る推行女兒ふむし  
実を踏ひてる形ふ来あしてふらうあるは  
菽菜師の言森の海ふぬしはし新代あ  
天の吉葛と唱て水を汲み火を坊き湯を凌の  
急ありしとやさ流を許田たために帰瓢の名を

ト

廿四







身ハ寸余小をまきまきして大を羨む自然の玉樂と知  
女のあり業を以てあり米穀を盗み喰ふはさう  
ひあく安然として風を吸ひ露を飲つ梢のさふ  
飛ひて身を清潔すしそかの毒如塵ふまひま  
目先の利のこみかろしひ蠅も去るさふ人を  
笑ふ小似たりされはこそ陸雲も又徳をわけられ  
を賦し美埃ぬらうのくさ心を詠れあ人の年  
たけ耳くくありて鳴りおとさるるを掬ひかこら  
侍るを唐衣つきくか沈氏を玉のうて  
あふ美人の髪をさすとき詠し日蓮上人の  
御書おわけ給ふとひある因縁をともかれり茶

生を齊王のさした王を怨む死して化せ依もの  
ありやされは怨る人の冥犯のうれかたを上人  
やうて流後志まふあうんまうい操とぬけか  
ふといあを彼乃鬼情いさこられさるものりあ  
只色も喜もうつくしき虫まををるものあり

朝起論

真貫

乾まに菫<sup>カン</sup>乃乃らふ紐とさ一紫あふと紫と  
わらうひ<sup>ハチス</sup>ツカミ<sup>ツカミ</sup>やうく目も紫やうにさう  
殺多の紫もさうくと喜あひさうい名残

共



あゝ廣くうまはし〜けさひわや〜くも希見  
うめも又もろ〜ぬる物やをわるんふき草花の  
目さともさえさりき実蓮んんりらぬし  
も風目さめ〜起物る〜り〜あや獨  
こちきふ〜千使例不在て曰汝者千釣藤  
を好〜たま〜釣起〜て家不來り〜得  
た〜親あ〜る世もいひ習〜る釣藤釣起  
の猪狩あ〜る千棄〜るあ〜んおほよそ釣藤  
人〜ろろめ抄さ〜にや〜釣藤さ〜し〜つれと  
いきたあ〜し〜釣おま〜わ〜るかの人昼寝  
〜して源責せられ〜た〜いふ異あり〜と〜い〜も〜い〜

ハ急乃罪のうれか〜か〜ん只母の〜る〜起とむ家の〜  
を要〜とせ〜示〜る〜わ〜ま〜り 風紀朝せん〜せし〜も  
假寐〜して既小賊害をすぬうれたる趙正卿ありさる  
をんもさ〜釣起〜〜と〜一〜は〜ま〜る〜る〜を〜後〜ふ〜い〜ふ  
胡楸の丸香あ〜め〜も〜〜天地と記〜〜る〜物も  
あ〜つ〜〜釣開〜〜て今〜あ〜て寐〜〜もの〜さ〜る〜て記  
め〜つ〜る〜そ自然の妙用あ〜〜て不謂老子語名を  
さ〜れ〜い〜ひ〜さ〜る〜る〜さ〜 それも世も大なる釣開を  
とも不結目さめ能冥〜性〜あ〜る〜あ〜〜〜聊も  
勅め〜い〜〜か〜も急あ〜〜る〜を〜あ〜〜〜て〜あ〜あ〜〜や  
い〜ん〜人〜是〜み〜習〜い〜安〜ふ〜〜る〜千鷗大鵬の〜り〜け〜



志ありと慕ふふおひて恍惚とて遂に釣寐  
の意もわあうら丹風起むとせも何まう私とふ  
わうと事をはりのあうた相く天の朝冥と  
等しうと何まう無はれう有吾の唇を  
心と使わ笑みと黙然と見えう蓮葉の匂ひ  
吾あう事宇治の綱伐あわのしや行方あうはそ  
ありふ事はこれと何あう周縁あうと  
旨とさうかうとつれと例の節カニクサもて心さうか  
忽忘をたきう歌の

吹上國見平記

真洞

今年生れ末吹上は此種をまうんとて例の友  
とらわしうとて釣みうとわあもぬける糸柳の  
朝朗心の釣の多程引弛め是あうせてあ見え  
攀うれはあう人えう。松と枝とを交ふ山あう  
小屈曲あうは松とてはあうとていれけ答あう  
意の善きは匂ひうと彼の三百七十余首の哥は情  
もまうと思ひ深へられ嘗あうのこふ情うとてはも  
受得う何ありえうとれと遠小酒おの事種を  
八重あう衣あうと山崎良由の磯小棚引加

ト

共



葉の如律をかくと塩の山の夜己小利益の流を  
たれ見つ川の絶ぬ流を踏てありといひ白雲を千か  
くれ寂寞とて生濟度の海未ありさくく  
和川以てその驛をふめめとて題目そのむう  
しを疎しとてこれ川山の暮ふらと荒川の  
名よふこれ芦川のあしこの程も深小くく  
橋跡よかられと流ほのかしとてそのうれ笛吹  
登るんくみ流のそわくくし片糸のこあとか  
あよとあをさ富士川の暮ふあうれてを思沃  
山をめぐりて舟客のうくくを新をかくく市  
川の里卯花紙干あくく多時多流風情

あり都て山千流ひ流と帯きくをく雲柱わくは  
雲のたれまきひ流めくくやまの脊中うくくえあは  
慮悉美景をそはも自然あるおめくくをくく  
感動せらふは吹上の山又上まを人志くぬ  
太山木の繁くおしあひく先達の笠をか  
たとぬおあしとて巖時まら叫く人を叫が  
水乞を志しとて啼く石を跌あつとて人の  
志しへみ付を密み汗しとていよれハ谷丸のひく  
吹よるそ実吹上とていあをくし



送鷹園主東遊序

静管

一堂のうちにありて、  
志むるもの風人のとよに志を交ありとれハ  
古人も幻術の才一とて、  
茶を煮る翁一とて、  
かゝるものを、  
わづらひ旅店に遇る方士の杖をかり、  
生涯の榮花を、  
魂の入る、

おかしな招魂の法を、  
やまへ入つて、  
それ、崑山の玉光り、  
術を、  
其辛苦も、  
修して、  
比、  
何、  
鷹園の、  
其、  
古翁の細、







垣みをかゝるぬのまゝらふさひまのりきしき  
いふせしもそめしふ三疊のかられ不をつらりて  
観修のいしはあるといふもるか小義素乃  
墨の痕をきよめころより卓ひしつを爐に  
かゝりふあゝ是あのれうたふ王とまゝるは  
まかりこしめしき白炭のまらまやををまの  
まのたよりふさつしき葉あめれと風煙  
平かくてもまゝしきをさしひらひり  
あつりゆいしきとあつりまゝあゝりしきも  
ふられしなまゝつたふ人あゝりしきまゝあゝりし  
いふうらもなまゝかゝりしきまゝあゝりしき

とる事をきみて共年主客のまらちれまゝはを  
をかゝりしきまゝもまゝ安まをまらちれまゝの  
一室あゆみありしきとあつあや嵐まらちれ  
まゝしつちめらゝのたらひ小やと笑ふ人もあゝ  
んうしあゝ南港小築とりふれれ不居のりて  
まゝるころ社友めりしこの四字を兼醜ふ  
鐫おくりたるよりつひそれおまらせてかくよふ  
るりあゝありぬまゝ澤姑をめつるうあまりの  
戯まふ赤電子鴉爪室あゝと書くもあつりし  
まゝ似てさる不免図らゝかゝりしきまゝあゝ



自誠

護物

世より山と形ふ人も世を棄るをありふ人も  
其の如く〜と世法を〜のふ一節ふかえ  
らば思ひ及ぶふは〜も成就を傳や者なき  
地平きふ〜そのハ地ふよ〜と〜  
るも傳れハそのあも業ま〜け〜  
た〜ぬこそその〜むあ〜ぬ〜  
ありや舟平舟有松ふ虫阿〜も出ハ  
芋ふ〜菜虫と菜ふ生伝兼虫を虚を花  
といふハ米を〜と〜る〜

た〜酒出を〜、猩〜を〜  
虫の類を〜も 鱧〜と〜る虫の類の  
膝ハ葉と〜も〜生れ〜古ハの本熊山  
うハ、鳩鳩の芥の柄も朽あん世を形ひ〜  
空に蚤〜葉も〜ふ〜いあ〜  
め〜れて〜の春〜  
〜の梢ふ〜の春秋〜  
結菴の煙ふ〜羽焦〜夏虫も蜂蝶の夕を  
知〜を蟻の〜も風ふ破連月ふ消〜  
〜の造化ハ〜也〜を〜  
〜と〜んと〜飲〜もよ〜



虫有撃持小忍癒の虫不<sup>レ</sup>佛不慈悲の虫有伯夷  
叔齊ハ忠臣の虫ふらりもつて首陽小飢へ玉造の  
小町ハ修玉の虫ふらりれとそらゆのふらり海より  
〜もまふ後の虫結あせる業あり〜何桑の尻  
橋小瓶〜依金ハ塙と化〜〜あられ  
ふおのれをそらぬふおららふをそらぬはし  
て哀れあるうとある〜もまふ虫よ虫世を秋の蛇  
のあをたの〜もまふ蛇牛の家を離れ候〜の  
虫の簞も雨もりてまらのむ本陰ハ〜と母自  
家障の子み一節ふらけ均し道をまら〜す  
後世のみらハ何ら〜と〜

住吉御田記

鶯笠

文政七年甲申臯月二十八日乃や住吉の神の  
御田の祭をうほり〜友とらふりさあされと  
みふらぬささ〜みふらぬささ〜みふらぬささ  
りれ〜もまふ〜もまふ〜もまふ〜もまふ  
〜破き〜はつけ〜周とちまは〜もまふ〜もまふ  
〜もまふ〜もまふ〜もまふ〜もまふ  
かの宮居あははまらり〜もまふ〜もまふ〜もまふ

住田



















何うもつとあやうひふを好めりもさるの簀  
穂あづらんよりも程まはしうわらわらふて  
吾ふわくをう〜とらちも破るく思ひつゝも  
さきくに捨てるたこそあううあも無慙あれ候令  
弾ともんをばう〜何ものれあまを〜とあう〜  
〜むるや

贈鳥辞

解雷守

斥鷃を九青の鵬を羨む鶴と甲ふ似合て穴  
をわら鳥を流るもの〜ふもあ〜に賢あ〜て

さ〜ゆ〜家そむらひけあさかの梅は白ひめあ  
羨む妻の秋も五月毎の晴るわやあ〜く〜と  
萩も秋の萩の月の明〜けさあも〜ら啼〜て蘭  
閨錦帳の羨をや婦も妻樓の曉あ〜ぬ軒を響  
う〜旗重のゆあ〜めを啞〜〜をさき〜ふあ祥と  
啼て遠〜境の人を去〜を世目のあ〜の〜りもむい  
う〜〜わ〜ぬあ〜いを抱を泪如雨と詠〜も実  
さそあ〜んか〜い〜あれい貞觀の帝ハ一枝ふ  
かへて金樹小棲あ〜んとそのをほひ〜〜せ〜  
あぢうぬ君とさう〜とを啼〜つ〜け〜い〜あま  
めさ〜る〜ん地そせ〜は箆のちさ〜と〜人〜の〜



ちぬうけにわしと夕へとあく糞土のちぬれを啄  
 牛馬の腐肉を喰むととる黨をあつめ陣をあし  
 あらる市中秋奠餅を給ひ又邑里の家根を  
 堀り小多六菓をくひあはれ其振露ひめけくかきへ  
 けし能性権現あまのしから林氏の鶴あまうはし  
 きとかくとくかく汝の罪をせめはも彼の存驕の  
 待とふとあはれ待るも汝を電母めくうも笑  
 みては毛とさくかく

此の巻は...  
 此の巻は...  
 此の巻は...

女訓孝經

和漢繪入 全一冊

女訓の條ありて...  
 孝の義ありて...  
 必用のとき

和經弟子撰

漢百年先生述 全一冊

此書仰光の...  
 孝の義ありて...

古文孝經解

金勝翁述 全二冊

此書孝經の...  
 孝の義ありて...

古文孝經講釋 全三冊  
 孝の義ありて...

日本橋通貳町目 小林新兵衛

翁問答 中江藤樹先生著 全三冊

此書中文と...  
 孝の義ありて...

唐詩選 和訓 全三冊  
 五言律 全一冊

唐詩選 繪本 五冊  
 孝の義ありて...

孔子家語國字解 鏡明先生述 全十冊

孔子事蹟圖解 全三冊  
 孝の義ありて...



